

# 「オリンピック出場という夢の先に 自然とあつた開発援助への道」

子どものころ、「オリンピックに出場しない自分なんて考えられなかつた」という元五輪スイマーの井本直歩子さんは、国際大会で開発途上国選手たちの姿を目にし、開発援助に興味を持った。JICAインターンとしてアフリカの地を踏んで以来、第2の夢をかなえ、持ち前のバイタリティーで紛争後の復興支援に取り組んでいます。



## 五輪スイマーからの 転身

「ルワンダで支援していた障害を持つ除隊兵士が、職業訓練で

作れるようになった靴をプレゼントしてくれたときは、本当にうれしかつたです。私は足が大きないので入りませんでした」と笑うのは、ガーナ、シエラレオネ、ルワンダなどで、JICAの平和構築支援にかかわってきた井本直歩子さん。2007年10月からは、国連児童

基金（UNICEF）スリランカ事務所の教育プログラム・オフィサーとして、教育プログラ

ム全体の計画・モニタリング・評価を担当している。

井本さんは元五輪スイマーだ。3歳で水泳を始め、小学3年で全国大会に出場、1990年のアジア大会（北京）では50メートル自由形で銅メダルを獲得した。さらに、94年アジア大会（広島）で金メダル、96年アトランタ五輪では800メートルリレー4位という輝かしい成績を収めるが、シドニー五輪選考会後に引退、イギリスの大学院に進学する。

そこではスリランカとルワンダを事例に、紛争後の国の援助協調について研究した。

「初めて国際大会に出場したころから、海外に対する興味がありました。先進国のスイマーにあこがれるのと同時に、開発途上国選手たちにも関心があり、どんな環境で練習しているのかななど、いろいろ知りた

かったですね」

覚えているのは、アジア大会の選手村食堂で、プリンのカツプを高々と積み重ねて遊んだ途上国の選手の姿。「私たちが

試合に向けて栄養バランスを考えながら食事をしているときに、とてもたくさんのプリンを食べていたので、自国では食べられないんだろうなあと、栄養の知識も十分ではないのかなと思いました」。プールが壊れ、国では練習できない選手や、コーチのいない選手もいた。水着に穴があいていたり、ジャージの支給もなく普通のTシャツ一枚で

「プールでは同じスタートラインに立つて、実際はそうではないんだ」と感じたといふ。

次第に、「大好きな水泳に打ち込める自分が本当に幸せで、現役を引退したら、何か人の役に立てる仕事をしたい」と考えるようになっていた。高校3年の4月から7月にかけて起きたある出来事が、その気持ちを決定的なものとする。ルワンダの大虐殺だ。井本さんは大学受験の面接で、「将来は紛争を解決するために働きたい」と答えていた。

## アフリカで新たな キャリアをスタート

初めて開発援助の世界に足を踏み入れた場所は、修士号取得直後の03年、インターノとして渡ったJICAガーナ事務所だ。当時、事務所次長だった小淵伸司さんはこう振り返る。「面接の際、話すうちに競泳の記録保持者だということが分かり驚きました」。

ガーナでは急な仕事や出張を頼むことも多かったですが、どれも前向きに取り組んでくれました」。

インターノの期間は3ヶ月だけだったが、JICAが北部で展開していた農村開発プロジェクトの専門家がマラリアでダウン、代役に抜てきされた井本さんは滞在を半年に延長して貧しい住民の自立支援に取り組んだ。住民たちとともに仕事をするという経験は、彼女を大きく成長させた。

その後、短期または長期の企画調査員として、しばしばJICAの仕事にかかわるようになる。その内容は、高校生のとき心に決めた平和構築・復興支援プロジェクトの企画・運営だ。



Imoto Naoko

国連児童基金スリランカ事務所  
教育プログラム・オフィサー

# 井本 直歩子

挑戦者たち  
Stories of  
Challengers  
Vol.29

04年9月には、インターーン時代を過ごしたガーナに舞い戻り、紛争終結後もないシェラレオネを行き来し、フィールドオフィスの立ち上げやプロジェクトの企画に取り組んだ。

「当時のシェラレオネは、建物は壊し尽くされているし、両腕を切断された人たちがうろろしていました。紛争に対する

皆の記憶が生々しく、でも、11年続いた紛争が終わった喜びと希望に満ちていました」

ガーナから戻って数ヶ月後、今度はJICAケニア事務所に



スリランカ教育省の職員を対象とした統計分析と計画策定のワークショップで、スリランカでは20年以上にわたり、北東部を中心に居住する少数派タミル人の反政府武装勢力が分離独立を目指し、政府との間で内戦状態となっている。井本さんが所属するUNICEFは、教育環境の厳しい北東部への支援も実施しており、政府との難しき調整に取り組まなくてはならない

いた。そこを拠点にルワンダ駐在員事務所を立ち上げるためだ。事務所が動き出した後は、あの大虐殺で障害を負った除隊兵士たちに職業訓練を行うプロジェクトに着手した。

### 復興支援の難しさ

紛争後の国での援助活動は、通常とは違った難しさがある。特に政府関係者を相手にすると、例えばルワンダでは、除隊兵士を支援するなどを、政府はどう受け止めるのか。受益者はフツカ、ツチカ、戦争の加担者か、被害者か。政府の決断を握る人はフツカ、ツチカ。どちらかに偏つた決断をしていないか、政治的に利用されていないか。仮に戦争の加担者だった人に日本が支援をした場合、被害者はどう思つか。憎悪を

数年ぶりに大好きなシェラレオネを訪れたとき、「かつての希望は薄れていて、国民の中にはまた不満や失望感が積もっていたような気がした」と、その行く末を憂える。

語学が好きという井本さんは、行く先々で土地の言葉を覚え、

友人を増やしてきた。紛争を経験した国の人からは、息を飲むような話を聞くことも多い。ルワンダでは親しくなった人から、隣で姉がナタで頭を割られて静かに息を引き取つていつたという生々しい話を聞いた。言葉も出なかつた。友人はその体験以

助長したりしないだろか。そういう細かい配慮が大切なことです。初対面の人にはいきなり「戦争ではどちら側でしたか?」と聞くわけにはいかない。「親しくなった人に、絶対に聞いても大丈夫とか?」と聞くわけにはいかない。

親しくなった人に、絶対に聞いても大丈夫とか? と聞くわけにはいかない。



人懐っこいシェラレオネの子どもたちと記念撮影。援助が現地の人に喜ばれるのを見ると、「JICAや外務省、日本の納税者、政治家…と、すごくたくさんの人々の決断や支援が今ここに届けられて、その最後尾の私がこれを見目撃できているんだなあと。そうした人々に感謝して、報告・発信しなければといつも思います」

Imoto Naoko

いもと・なおこ 国連児童基金(UNICEF)スリランカ事務所教育プログラム・オフィサー。1976年東京都出身。3歳から水泳を始め、96年アトランタ五輪出場。慶應義塾大学総合政策学部在籍中、米国サザンメソジスト大学へ留学。現役引退後、英国マン彻スター大学大学院で紛争後復興支援について学ぶ。JICAインターーン、企画調査員として、ガーナ、シェラレオネ、ルワンダなどアフリカ各地で国際協力に従事。日本滞在中はスポーツライターとしても活躍。2007年10月から外務省派遣のジュニア・プロジェクト・オフィサー(JPO)としてUNICEFスリランカ事務所へ。

降、家族以外とはほとんど言葉を交わさなくなっていたという。「戦争体験を聞くたびに、どうして人間がこんなにも残酷になれるのか、今でも疑問です」。

それでも、こういう場所で日本が果たせる役割は大きいと感じている。なぜなら、「大抵の国の人たちが欧米に対して反感を持っているのに比べ、日本のことはとても好意的に思っているから」。日本人として生きてきてよかつたと思つ瞬間だ。すべてではありませんが、地元住民のキヤパシティを十分考慮せず、面的な支援をする欧米の

ドナーと違い、JICAのきめ細かい支援は比較優位がある。やはり現場の人々の自立を支援しながら、手取り足取り行っていく支援でないと、本当に持続可能な発展は難しいと思います。

「バイタリティのある人」。彼女を知る人は皆、そう言う。現場では壁にぶち当たることもあるが、「何とかなる」それでもだめなら仕方ない」の精神で乗

り越えてきた。仕事もプライベートも基本的に楽しむ姿が周りの人を引き付ける。シェラレオネでの夜は、バーでほかの援助機関のスタッフと情報交換したり、ルワンダでは近所のおばちゃんたちと道路の掃除に繰り出たり、ルワンダでは近所のおばちゃんたちと道路の掃除に繰り出したり。また、行く先々で地元の子どもたちに水泳を教えてきた。かといって、髪振り乱して突き進むタイプでもない。日焼けを気にし、落ち込んだ日には花を買つ。「普通の女性の幸せに興味を引かれる(笑)」とはにかむ乙女な一面も。

現在赴任中のスリランカでは、

今もテロが絶えない。主な支援先が火種を抱える地域のため、細かな配慮が求められる。現在は教育分野を担当しているが、アフリカで培つた平和構築のノウハウが生きる。

「スイマーだったのは過去の記憶」と言いつつも、「スポーツは若者が一番熱中できることだし、大きな可能性を持っていると思います。いつかはスポーツと平和構築の分野に真剣に携わってみたい」。アスリートとして、開発ワーカーとして、夢をかなえてきた井本さんに、次のチャレンジが見えてきた。



スリランカ北東部トリンコマレーに出張し、教員研修に当たる井本さん。「大抵の国の人たちは、日本を好意的に思っている。日本人として生まれてよかったです」

### 泳いでマラリアをなくそう!

毎年5億人が感染し、100万人が死亡するマラリア。死者の9割がアフリカで発生し、そのほとんどが5歳以下の子どもだ。

2008年4月5日、マラリア予防のためのチャリティー水泳イベント「ワールド・スイム・アゲンスト・マラリア(WSM)」が世界中で繰り広げられる。目的は、マラリア予防に有効な蚊帳を購入する基金を集めること。05年12月に開催された第1回WSMには世界中の25万人が参加、150万ドルを集め33万張の蚊帳が子どものいる貧しい家庭に配布された。日本では井本さんが仲間のスイマー・アスイミングクラブなどに呼び掛け、マラリア予防を祈る33,000人が各地のプールで泳いだ。当日、JICAの仕事でケニアにいた井本さんも、気温20度を切るナイロビで10キロを泳ぎきった。

「私自身は一度もかかったことはありませんが、シェラレオネでは同僚や友人が何度もかかることも。ひどい高熱が何日も続き、相当苦しいようです」

今年は世界で100万人、日本で10万人が同時に泳ぐことを目指す。参加方法は、ウェブ登録し、当日プールで泳いで募金するだけ。もちろん、井本さんもスリランカで「10キロ泳ぐ」と宣言。「読者の皆さんもぜひ参加してください!」

WSMへの参加方法は、ワールド・スイム・アゲンスト・マラリア日本事務局ウェブサイト(<http://www.worldswimagainstmalaria.com>)または公式ブログ(<http://wsmjapan.blog46.fc2.com>)を参照。



元五輪スイマーの岩崎恭子さん(右から2人目)と中尾美樹さんもWSMに賛同し、第1回WSMで参加者に泳ぎのレッスンを行った

### アフリカの魅力は、生命力・「生きる」ことなんだって教えてられる

「目の下の関心事は、「開発」と女性の幸せ」

ドナーと違い、JICAのきめ細かい支援は比較優位がある。やはり現場の人々の自立を支援しながら、手取り足取り行っていく支援でないと、本当に持続可能な発展は難しいと思います。

「バイタリティのある人」。彼女を知る人は皆、そう言う。現場では壁にぶち当たることもあるが、「何とかなる」それでもだめなら仕方ない」の精神で乗

り越えてきた。仕事もプライベートも基本的に楽しむ姿が周りの人を引き付ける。シェラレオネでの夜は、バーでほかの援助機関のスタッフと情報交換したり、ルワンダでは近所のおばちゃんたちと道路の掃除に繰り出したり。また、行く先々で地元の子どもたちに水泳を教えてきた。かといって、髪振り乱して突き進むタイプでもない。日焼けを気にし、落ち込んだ日には花を買つ。「普通の女性の幸せに興味を引かれる(笑)」とはにかむ乙女な一面も。

現在赴任中のスリランカでは、今もテロが絶えない。主な支援先が火種を抱える地域のため、細かな配慮が求められる。現在は教育分野を担当しているが、アフリカで培つた平和構築のノウハウが生きる。

「スイマーだったのは過去の記憶」と言いつつも、「スポーツは若者が一番熱中できることだし、大きな可能性を持っていると思います。いつかはスポーツと平和構築の分野に真剣に携わってみたい」。アスリートとして、開発ワーカーとして、夢をかなえてきた井本さんに、次のチャレンジが見えてきた。

スリランカ北東部トリンコマレーに出張し、教員研修に当たる井本さん。「大抵の国の人たちは、日本を好意的に思っている。日本人として生まれてよかったです」